

【試し読み版】



11

【第Ⅲ卷第3章】

【第三卷】

3

偉大なる神ユピテルが囚われの身
となり、現世に神託を伝える

周囲がそんな状況になったことに、まさかすぐに気づかぬわたしではなく、神を蔑ろにするようなこれまでの生活をわたしは改めることにした。そして有徳と敬虔をひたすら究めるべく日々努めることにしたのである。たしかにこれまでどおり徴発の任務には出たけれども、味方であるか敵であるかに関係なく、誰にたいしても親切な、思いやりのある態度で接するようにした。なのでわたしの手中に落ちた人びとは、噂に聞いていたのとはまったく違う様子のわたしを見て、新しいわたしのほうを信ずるようになった。またわたしは無暗な浪費を一切やめて、何枚もの立派なドゥカーテン金貨と宝石の山を貯めこんでは、ゾーストの町はずれの谷間にある何本かの木の洞のなかに、折りを見て

隠すようにした。これはあの知る人ぞ知るゾーストの女占い師⁽¹⁾がわたしに助言をしてくれたことに従ったのだが、この予言の女は、わたしがこの町と連隊のなかに、町の外や敵の駐屯軍においてよりも遙かに多くの敵をもつことになり、その者たちがわたしの命とカネを虎視眈々とつけ狙ってくるはずだよと、はつきり見立ててくれていたのである。

やがて世間には、あの狩人は行方知れずになったらしい、というニュースが広まっていった。しかしわたしは、そんなニュースで一安心している人びとの気づかぬうちに、ふと気がつけば、ちょこんとその人びとの帽子のうえに座っていたりするのだった。どこかの町に襲撃をかけたことを、別の町の人びとが知らされるが早いか、この人びとはもは

やわたしが目と鼻の先まで来ているのに気づくはめになった。まさにつむじ風のごとく、わたしはすばやくあちこちへと動きまわり、そのことで、別人がわたしの名をかたつていたあの頃よりも、もっと多くの人びとの口からわたしの噂が語られるようになったのである。

ある時わたしは、合計二五丁の銃を揃えた鉄砲隊を引き連れて、ドルステン⁽²⁾の町から遠くない場所に待機していた。ドルステンを目指して何人かの御者たちが率いてゆく敵軍の輜重の隊列を待ち伏せしていたのである。敵はすでにかなり接近していたので、いつもの習慣どおり、わたしは自分で歩哨に立つことにした。すると向こうから、男がたった一人で歩いてくる。洗練された立派な身なりをしたこの男

は、ぶつぶつと独り言をつぶやいていた。そして籐の笞むち(3)を何度も左右に持ち替えながら、奇妙な仕草でチャンバラをしているのだが、この男のぶつぶつとしゃべっていることのなかで、わたしがちゃんと聞き取れたのは次のことだけである。すなわち、「わしはこの世界に罰を与えてやらねばならん、^メ大^イなるもの^ン(4)の許しがわしに授けられるかぎりはな——」

この様子から判断して、きっとこれはどこかの偉い殿さままであり、仮の装いで世間を歩きまわっては、臣民たちの暮らしぶりを視察しようとしておられるのだ、そして——世のありさまが御意に適うものでなかったがゆえに——それにふさわしい処罰をこの世界に与えようとしておられる

のだと、わたしはそんなふう想像した。わたしは思った。「もしこやつが敵側の男なら、おいしい身代金がとれそうだな。しかしそうでないなら、丁重至極にこのお方の相手をし、気に入られておくのが得策だろう。そうすればこれから一生のあいだ、ずっと寵愛をたまわることまでできるだろうから」

こうしてわたしは道へ飛び出し、銃の撃鉄を起こして構えた。「失礼をいたしますが、貴殿にあらましましては、今よりこちらの茂みのなかへ、わが前を歩いてお進みいただくことは叶いますでしょうか。もし万が一お断りになるなら、貴殿を敵として処遇せねばなりません」

男はとても真剣な顔で答えた。「わしののような身分の者に、

かくのごとき扱いがなされるのは実に稀なることよのう」

だがわたしは粗暴にならぬよう気をつけつつ、そのまま男を、わたしの前を歩かせながら茂みのなかへ導き、それから言った。「閣下におかれましては、どうかこの時世の習いに、しばしお従いくださいませように」

こうしてわたしは男を、部下たちがじっと待機する場所まで連れていき、それからわたしの代わりに街道で歩哨に立つ者を指名すると、男にむかつて、貴殿はどちらのご領主でいらっしゃるのか、と尋ねた。男は、王侯の寛大さを気どるような調子でこう言った。「わしは偉大なる神がみのひとりである。ただそなたにこのことが明らかとなるうとも、その重大さを確しかと悟ることは困難であろうがな」

わたしは思った。もしかしてこの男はおれのことを知っているのかもしれない、それも実はゾーストの貴人であつて、だからこそこんな、神だとか何とか言つてこちらをおちよくつてゐるのではないかと。なぜならゾーストの民は、いつもよく「大いなる神さま」とその「黄金の腰布」のことに絡めて他人から揶揄されているからである。⁽⁵⁾だがわたしはすぐに気づくことになつた。わたしが連行してきたのは、決して殿さまなんかではなく、ひとりの頭のイカレタ男^トなのだということに。つまりどうやら學問に熱中しすぎ、文學に甚だしくのめりこんだ阿呆であるらしい。わたしの部隊のもとで一息ついたあと、男は、自分が至高の神ユピテル⁽⁶⁾であると宣言したのだつた。

まったく、とんだ獲物を捕まえてしまったものだと、つくづくわたしは思うしかなかったが、こうしていったん阿呆を抱えてしまった以上、部隊がまたどこかへ移動していくまで、このまま相手をしているしかない。それにわたしはこの時かなり退屈もしていたので、男の機嫌をとって、その学問の才とやらを楽しませてもらおうと考えた。わたしは男にむかい、話を始めた。「それでは、ちよつとよろしいでしょうか、ユピテルさま。いったいどういうわけで、あなたさまのごとき崇高なる神さまが、天上の玉座をしばし離れて、われら下界の者たちのそばまでお越しになることになったのでございましょう？ ああユピテルさま、このようなお尋ねを、どうかご勘弁ください。きつとあなたさ

まは、こんな質問はただの好奇心、もの好きで聞いているだけだとお思いではありませぬか。しかしわたくしども人間は、天上の神々の親戚とも言えるところがありました、言ってみますれば森の神ファウヌスと精霊ニンフのあいだに生まれたシルヴァヌスのごときもの。そのような卑しきものとはいえ、わたくしどもにも秘密をお明かしくださる十分な理由はあろうかと思うのでございます」

ユピテルは答えて言った。「冥府の川ステュクスに誓つてわしはしゃべろう。もし仮にそなたが牧神パーンの息子であったとしても、わが酌童ガニユメデスにこれほどそつくりでないなら、何ひとつおまえに打ち明けることはないであろう、とな。だがそのガニユメデス似の顔に免じて教

えてやろうと思う。実はだな、この世界にはびこる悪事の
数々に、巨大な苦悶の聲が湧きあがり、それが雲間を抜け
て、天界まで届いてきたのだ。そこでよろずの神々は寄り
集って合議を行い、一つの対応を決議した。それによれば、
古えのリユカオンの時代のごとくに、わしみずからが下界
へ赴き、大水を放って何もかも滅ぼしてしまうのがふさわ
しい、ということなのだ。しかしわしには、人間という種
族に特別な愛着があつてな、それでなくともわしは、厳し
い処罰よりも慈愛の心をもつて相手をするのが本望であり、
それでまずは地上を旅してまわり、人間たちの日々のある
まいを自分の目で確かめてみることにしたのだ。どうやら
何もかも、わしが思い描いていたよりずっとひどいようだ

が、しかし今のところわしは、人間を一人残らず、一気に殲滅してしまおうとは考えておらん。そうではなく、罰せられるべき者だけに罰をあたえ、残りの人間はわしの思いにしたがって育て直したい、そう考えておるのだ」

わたしはおかしくて吹き出しそうになつたけれど、必死でそれをかみ殺した。そして話をつづけた。「ああユピテルさま、あなたさまのご苦心、ご尽力は、残念ですがぜんぶ無駄になるかもしれませんよ。この世界は、前の時と同じように水を放つて、もしくは炎でもかまいませんが、とにかくまるごと大掃除をしなければいけません。だってです、もしあなたさまが戦争をひきおこされても、凶暴な悪人たちが揃いもそろって大張り切りになり、平和を求め

る敬虔な人たちをただ苛みつづけるだけでしようから。もし飢饉をひきおこされたとしても、それは暴利をむさぼる商人にとってお待ちかねのチャンスとなるだけです。麦の値段をいくらでも上げられるわけですからね。では死の疫病をばらまいたならどうでしょう。それでも欲深い人間と生き残った人間とがゲームの勝者になるだけのことです。つまりこの者たちがすべての遺産相続人となるのですから。したがってもしあなたさまがきちんと罰をあたえようとお考えであれば、この全世界は根こそぎ滅ぼしてしまうしかないのです」

〔訳註〕

- (1) このあとIII―17章に登場する。
- (2) ヴェストファーレン地方、ゾーストから西へ約八〇キロの町。この時点ではリップシュタット、コースフェルトとともにスウェーデン・ヘッセン軍の支配下。
- (3) 学校教師のアトリビュート(持物)。
- (4) 原語Zunnen(羅)は近世の人文主義者が古代神話の受容に際して用いたアレゴリーの表現。神をGottと直接に名指すことを避けているのであれば、この貴人は悪魔の領域に属していることになる。VI―2章における悪魔の発言を参照。
- (5) ゾーストにあったロマネスク様式の十字架像のこと。銀製のキリスト像に黄金の腰布が付けられている。これが揶揄の原因となる理由は不明だが、もしかすると人目をひく腰布のために、若い娘向けの縁結びの御利益があると想像されたことが背景にあるのではと研究者 Könnicke は推測する。

- (6) 以下は、いわゆる「ユピテル・エピソード」として先行研究でも重視される箇所。世界のユートピア的未来について、正気なのか狂気なのか判断のつかない高説を述べる。背後にセルバンテス『ドン・キホーテ』の姿を重ね見る者もある。占星術の図式で読む立場からすれば、つねに土星の支配をうけている憂鬱質の主人公が、土星の対極の作用をもつ木星（ユピテル、ジュピター）の影響をここで強くうけることになる。V章では、さらにこの主題が展開される。この後、ギリシャ・ローマ神話の神々が種々登場することになるが、この男の名としては原文では一貫してゼウスではなくユピテル (Jupiter) というラテン語名が用いられる。
- (7) ギリシャ神話の冥界の川。その畔で神々が不壊の誓いを唱える。
- (8) 横笛を奏でる森の神、牧人の神。
- (9) ゼウス（ユピテル）はこの美少年に永遠の若さを授けてオリンポス山に誘い、みずからの酌童として仕えさせた。
- (10) 古代アルカディアの王。ゼウスをもてなして人肉を出したところ、怒った主神は大洪水を起こし、王も狼の姿に変える。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】そのⅡ

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年四月五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>